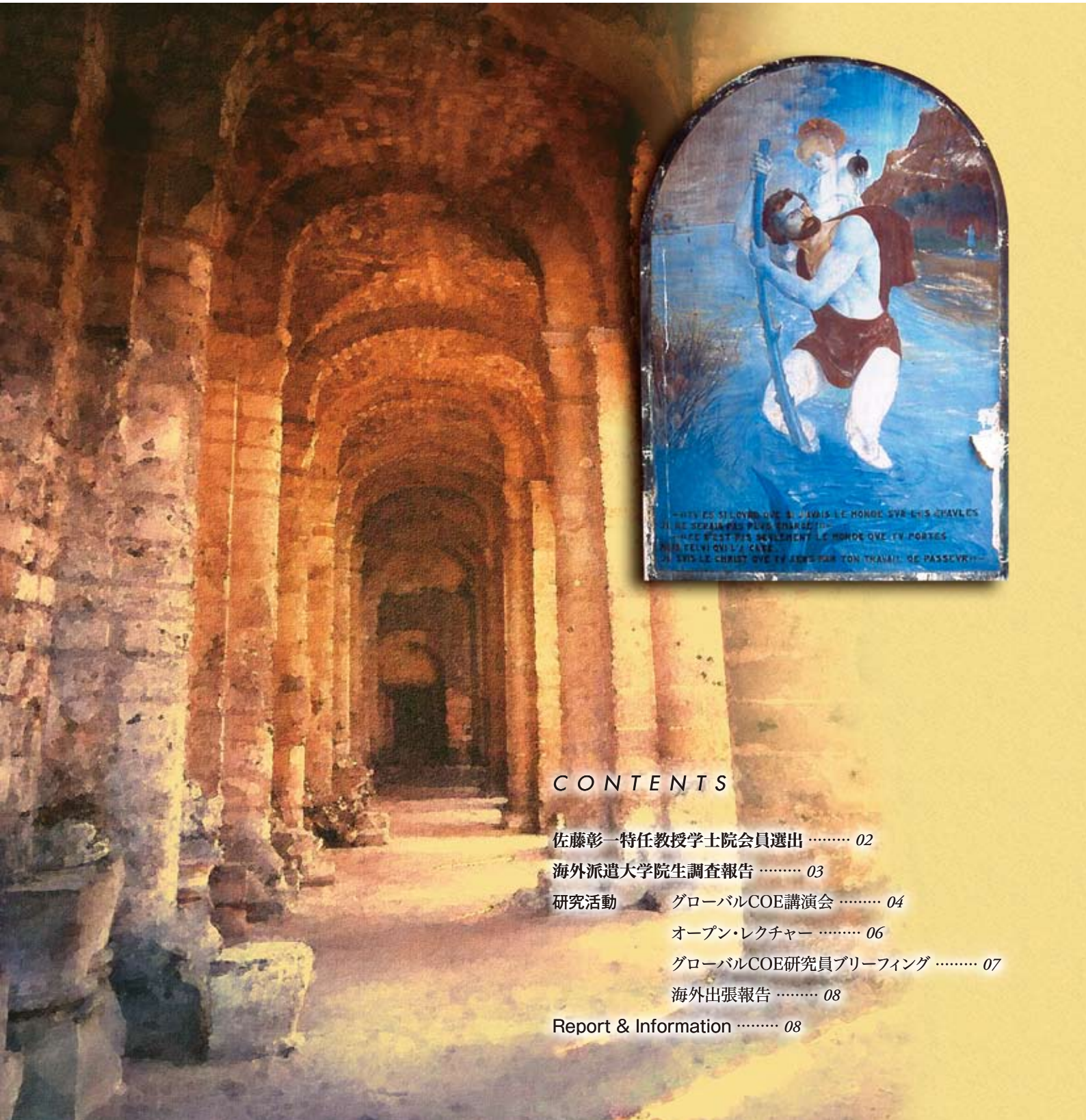




国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

2010.1
No.8

テキスト布置の解釈学的研究と教育



CONTENTS

- 佐藤彰一特任教授学士院会員選出 …… 02
海外派遣大学院生調査報告 …… 03
研究活動 グローバルCOE講演会 …… 04
オープン・レクチャー …… 06
グローバルCOE研究員ブリーフィング …… 07
海外出張報告 …… 08
Report & Information …… 08



佐藤彰一特任教授 学士院会員選出

2009年12月14日、名古屋大学グローバル COE プログラムの拠点リーダーである佐藤彰一特任教授が、日本学士院の新会員に選出されました。

日本学士院は、学術上功績顕著な科学者を優遇するために文部科学省に設置されている機関です。1879年(明治17年)に福沢諭吉を初代会長として創設された東京学士会院を前身とし、定員70名の人文科学部門(第一部)と定員80名の自然科学部門(第二部)から構成されています。第一部第一分科(文学・史学・哲学)における西洋中世史家の選出は、日本学士院の歴史上、佐藤教授が初めてのこととなります。

メロヴィング朝フランク王国を専門とする佐藤教授の研究手法は、人文学者としてのテキストの精緻な読み込みと、社会科学者としての諸学の応用の巧みな組み合わせを特徴とします。その実証主義的な成果は、2002年に日本学士院賞を受賞した浩瀚な博士論文『修道院と農民』(名古屋大学出版会、1997年)、『ポスト・ローマ期フランク史の研究』(岩波書店、2000年)ならびに『中世初期フランス地域史の研究』(岩波書店、2004年)に収められています。佐藤教授がナマのテキストと対峙することで浮かび上がったポスト・ローマ期社会像は、ローマ時代とカロリング時代という輝かしい時代に挟まれ、相対的に低い評価しか与えられて

こなかった当該時代のイメージを一新しました。

佐藤教授の著作は、上記の厳密な実証研究にとどまっているわけではありません。『歴史書を

読む——『歴史十書』のテキスト科学』(山川出版社、2004年)では、佐藤教授が長年馴染んだトゥールのグレゴリウスによる『歴史十書』を材料として、従来の史料研究とは一線を画すテキスト科学の具体的な作業を披露しました。さらに「ヨーロッパの中世」全8巻の劈頭を飾る『中世世界とは何か』(岩波書店、2008年)では、ユーラシア世界システムの中のヨーロッパ半島という観点から従来の西洋中世像を書き換える斬新な歴史像を提示しました。これらの著作においては、佐藤教授が拠点リーダーをつとめた21世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」ならびにグローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」で彫琢された学知がふんだんに盛り込まれています。そしていずれも一般向けの啓蒙書でありながら、学問史上の解決すべき点を提示し、読者に知的な問題への参加を誘い、学問をすることの愉しさと厳しさを共有する筆致となっています。

佐藤教授は、以上の研究成果を国内サークルにとどめることなく、英語やフランス語による口頭報告や専門的論文をつうじて、海外の研究者集団に対し積極的に発信しつづけています。また国際学士院連合に属するイギリス学士院やフランス学士院には、これまで佐藤教授が日本に招聘した歴史家が数多く名を連ねています。そのようなネットワークを持つ佐藤教授の会員選出により、日本と世界の学問コミュニティとの連携が今後いっそう加速されるでしょう。それは国際水準の研究と教育をめざす名古屋大学グローバル COE プログラムにとっても、そして日本の学問の今後のあり方そのものにとっても、大いなる裨益となることが期待されます。

佐藤教授の学士院会員選出をこころよりお慶び申し上げます。

(文責：小澤実)





2009年度

海外派遣大学院生調査報告

第1回

グローバル COE では、「大学院生海外派遣事業」の募集を年2回行い、博士後期課程の学生に対して、課程博士論文の執筆に必要な海外での調査を支援しています。募集に際して博士論文執筆計画および海外調査計画を提出してもらい、グローバル COE 学術委員会の下に設けられた選考委員会で応募書類を審査し、さらに面接を実施して支援する海外調査を決定しています。2009年度の第1回目の募集で採用された竹田さんの報告書を以下に掲載します。

キリスト教における蛇に関する系譜

竹田伸一 ● 文学研究科 美学・美術史学 博士後期課程2年

私の研究テーマはキリスト教における蛇を、その文字テキストと図像テキストの歴史的系譜と変遷から研究するものである。文字テキストの解明には聖書学の歴史的・批評的研究方法を用い、聖書テキストの原初的な意味を確認し、その後の諸テキストにおける解釈の変遷をたどる。図像テキストの解明には美術史学の図像学的研究方法で考察し、ヨーロッパの中世末からルネサンスにかけてのキリスト教美術の歴史の変遷を考察する。キリスト教美術における蛇の図像は三つの類型に大別できる。第一は最も古く原初的な図像で、アダムとエバを誘惑した楽園の蛇である。蛇の図像は古代から中世にかけてまでは動物として描かれるのが常であるが、時には悪魔を表わすドラゴンで表わすこともあった。12世紀末の Peter Comestor の創世記注解の影響を受けて、以後500年間は女性の顔を持つ蛇が多く描かれることとなった。第二は創世記3:15（原福音）に由来する図像で、キリストまたはマリアが蛇を踏みつける図像である。蛇は悪魔、サタン、原罪、死の力、滅びそして後には敵対者、異端を



象徴するものとなり、キリストの復活や無原罪のお宿りの図像として用いられた。第三はモーセによって荒野で上げられた青銅の蛇の図像で、キリストの十字架の予型として大いに強調された。これまで蛇に関する図像を部分的にと

イスラエル・イタリア・オーストリア・ドイツ・フランス・イギリス



らえる研究は様々あったが、本研究はキリスト教における蛇に関する系譜を総合的、包括的にとらえようとする試みである。これによって蛇の系譜が聖書神学的な救済史とその後のキリスト教史において重要な役割を演じてきたことを改めて示すとともにテキスト布置解釈学の立場からその歴史の変遷を位置づけたく願う。

今回の調査では、まずキリスト教美術の原点であるイスラエルの事物と風土を確認することができた。更にヨーロッパの教会、美術館、博物館、図書館における調査では、絵画、彫刻、ステンドグラスなどの実物に触れるだけでなく、蛇の図像の流布に大きな役割を果たした Bible moralisée、Biblia Pauperum、Speculum Humanae Salvationis、Malermi Bible などの書物媒体の写本、木版、活版などの古書の現物に触れる貴重な経験、資料収集ができた。また調査対象とした主な絵画や彫刻は、ミケランジェロ、ラファエロ、クエルチア、マゾリーノ、マザッチョ、ギベルティ、ウッチェロ、ヴェッキエッタ、マンテーニャ、ティツィアーノ、ティントレット、ヴァザーリ、カラバッジョ、デューラー、クラナッハ、レンブラント、ルーベンス、ファン・デア・フースのものであった。



グローバル COE 講演会

Intentions, Conventions, Performativity: Medieval Discussions about Sacramental Formulas and Oaths

意図、慣習、言語的遂行性——聖別定式書と宣誓に関する中世の諸議論

イレーヌ・ロジエ=カタシ 教授 (パリ第7大学 高等研究院 (EPHE))

2009年9月24日(木)17時—19時

ある表現がもつ文字どおりの意味、意図された意味、社会の中で通用する意味の区別という現代の語用論と関わる問題を、13世紀以来の宣誓、約束、聖別定式の理解をめぐる中世思想家たちのさまざまな異なる立場の内に見届けていく。アウグスティヌスは「嘘」を「欺こうとする意図をもって虚偽を表わすこと」と定義し、話者の意図を重視したが、しかしその後、語られたことの虚偽（言葉それ自体に関わる）と語る者の虚偽（意図に関わる）が明確に区別され、どちらに重点を置くかということが議論の焦点となっていく。

中世においては、例えば宣誓や儀式における定式は、神という存在を証人とし、その前で、自分の言明が真であると主張する行為である点で、発話の真偽の問題に関して非常に興味深い論点を提供するものであった。司祭が洗礼を授けるとき、その洗礼の有効性は、語られた言葉に依存するのか、それとも司祭の意図に依存するのか？ 前者だとすれば、司祭が何らかの理由で言い間違えたとき、洗礼は

無効になるのか？ 後者だとすれば、司祭の意図はわれわれには知りようがないという問題が生じる。こういう状況で採用されるようになったのが、教会それ自体の意図、および発話に付与される一般の用法を重んじる立場であった。これらの問題は、偽りの誓い、結婚における聖別定式との関連でも、示唆に富んだ諸々の立場を生むことになった。とくに結婚は、一人ではなく二人の人間が、神と会衆の前でたがいに宣誓するという点で、さらに複雑な要素を含むことになる。

ロジエ=カタシ教授は、中世哲学の専門ではない聴衆に対しても非常に分かりやすく、かつ興味深く、最近のオバマ大統領の就任式における定式の言い間違いが生んださまざまな議論をもエピローグとして加えつつ、神学、哲学、レトリック、文学、法律などの広い領域におけるテキストとその解釈について、非常に示唆に富む講演をしてくださった。

(文責：金山弥平)

追記 ●ロジエ=カタシ教授をお招きできたのは、愛知教育大学教授の渋谷克美先生が仲介の労をとってくださったお蔭である。その渋谷先生が、2009年12月9日、致死性不整脈のため、61歳の若さで突然帰らぬ人となられた。渋谷先生は、オッカム研究において国際的に活躍された第一人者であるだけでなく、教育者としても柔和で温かく学生を指導してこられ、名古屋大学哲学研究室の学生たちも先生には一方ならぬお世話になった。先生のかくも早い御逝去は、研究仲間および学生たちにとってこの上ない悲しみであるとともに、日本の中世哲学研究にとっても大きな痛手である。残されたわれわれになしうることは、先生の歩みを範として、われわれ自身哲学研究に邁進することしかなく、そしてそれこそが、渋谷先生がその思想解明に情熱を燃やされたオッカムやアクィナスとともに、われわれに望んでおられることであると強く確信する次第である。

England and Englishness: The Modern Problem of an English Identity

イングランドとイングリッシュネス——近代におけるイングリッシュ・アイデンティティの問題

ジョージ・ヒューズ (元東京大学教授)

2009年11月12日(木)17時30分—19時

イギリスで1992年に総選挙が行われた際、保守党のジョン・メイジャー首相が演説で引用したのは、ジョージ・オーウェルの「イングランド、君たちのイングランド」であった。苦くて生ぬるいビール、緑の芝生、露骨で芸のない広告、不格好だが物腰柔らかな人々、そうしたものに囲まれた日常生活こそイングランドであると謳ったエッセイである。それを引用することでメイジャーはEUに批判的な保守党の政策を印象づけようとしたのだが、意に反してもの笑いの種になってしまう。オーウェルの社会主義は保

守党の政策とは相反するものであったし、そもそも多文化・多人種共存が明らかになっていった1990年代には「イングリッシュネス」の概念自体まったく見当はずれのものになっていたのである。メイジャーは1940年代におけるテキストとコンテキスト両方を誤読することで、1990年代に滑稽なメタ・テキストを生み出してしまったのだ。

オーウェルが「イングランド、君たちのイングランド」を書いた1940年は第二次世界大戦勃発直後であり、「イングランド」という国土と風土への郷愁が愛国心とともに極

度に高まっていた時代である。それは実は大英帝国という巨大に膨張した過去の遺産が衰微と崩壊の過程にあり、人々がアイデンティティの危機を感じていたことの裏返しでもある。オーウェルの描いた「イングリッシュな」庶民生活は、現実には存在しないベネディクト・アンダーソンが言う「想像の共同体」であり、オーウェル自身もそれを承知していた。同時代のBBCやタイムズ紙などのメディアにおいても、イングランドが固有の風土に生まれた特異な文化と精神性を保有しているというテキストが多用されることで、架空の「イングリッシュ・アイデンティティ」が共有されていくことになった。グレーム・グリーン「地図なき旅路」(1936年)や「無法なる道」(1939年)、ア

イルランド出身の詩人ルイ・マックニースのテキストにおいてさえ、うらぶれて無秩序なロンドンの街並み、卑俗な鉄のトンネルの描写を通した「イングリッシュ・アイデンティティ」の構築が見られる。

1990年代のイギリスにおいては、イスラム教徒を含めたさらに多様な人種と文化の共存が始まっていたのであり、オーウェルの描いた「想像のアイデンティティ」は明らかに共有されることのない架空のテキストでしかなくなってしまう。1940年代の「イングリッシュネス」は時代のコンテキストにより生み出され、テキストが構築し、さらにメタ・テキストを氾濫させていったのである。

(文責：大石和欣)

Mallarmé, Verlaine, Rimbaud, Lautréamont: la révolution du langage poétique au XIXe siècle en France

マラルメ、ヴェルレーヌ、ランボー、ロートレアモン——19世紀における詩的言語革命

ヴァンサン・ヴィヴェス(プロヴァンス大学准教授)

2009年11月17日 17時—18時

フランスにおけるロマン主義は、18世紀の啓蒙思想的な価値観へのアンチ・テーゼとして始まり、ヴィクトル・ユゴーらの第2世代の作家たちによって、文学、絵画、音楽など分野を横断する運動として確立していった。こうしたロマン主義の展開は、常に政治情勢の変革を画期として推移している。第2帝政成立前後から、ロマン主義が標榜していた世界の再詩学化や再キリスト教化に反対して、そして軍や教会によって作り上げられた社会秩序に反対して、フロベールやマラルメといったロマン主義から距離をおく作家や詩人が登場する。この新しい世代、特に詩人たちは、反抗と無神論と厭世主義とに突き動かされてロマン主義的な価値観や審美観を攻撃し、ことばや美学の体制を覆すことを目論んだといえる。

ステファン・マラルメは、ロマン主義的な詩人が神からの啓示を受けて詩作を行っていたのに対して、神なき「無」からの詩作をめざし、それにより詩学自体を彼の詩のテーマとするにいたる。こうしてマラルメは詩のその意味よりもむしろ、詩のリズムや音楽性や織り目を重視するようになるのである。こうしたマラルメ詩の特徴は『骰子一擲』(1914)で最も顕著であるといえる。

ポール・ヴェルレーヌは、その攻撃性においても理論的貢献という観点においてもマラルメに比肩しえないものの、やはり詩作を通じて世界の革新を目指していたといえる。ヴェルレーヌは、世界を前にしたためらいや不安を、ささやくようなピアノシモでアドルノ的な意味での感受性を作品化する。こうした特徴は、『艶なる宴』(1869)や『言葉なき恋歌』(1874)において顕著である。

ロートレアモンは『マルドロールの歌』(1874)におい

て、叙事詩や教養小説を下敷きにしながらも、西洋文化の基層をなす作品をパロディー化する。この作品は変幻自在に形式を変えながら、彼の同時代人たちが共有するような非人間的な価値観に基づく人間性の醜怪さを表現することで、恐怖として神を描くとともにあらゆる既存の文学的価値に批判を浴びせかけているのである。

アルチュール・ランボーは若くして筆を折り、詩をパロディーとすることでそこに意味を付与したといえよう。ランボーの詩はことばが詩へと変わっていく様を、力強さと自由さによって表現している。『地獄の季節』(1873)では、サタンをモチーフにするが、それはサタン(diabolos)の語源的な意味がしめす遊離や分散、あるいはシニフィアンとシニフィエによって内的に生成される関係性を根拠にした記号としてのsym-bolonに対するdiabolosを表現するためであり、詩作の持つ力強さを表現するためである。繰り返される自らの作品からの引用もまた、既存の詩的価値への批判であるとともに同一の感情の再現としてとらえることができるものであつて、それは批評によっては捉まえることができない詩の力強さを自由に表現しているといえる。

こうした革命的な詩作品の登場は、歴史のある時期に集中してみられるが、これは社会的に抑圧された時代の終わりや連動しているであろう。ロマン主義者たちがキリスト教とユートピア的社会主義の枠組みで行った「歴史」の変革だったとすれば、ポスト・ロマン主義の詩人や作家の試みはひとつの詩学の可能性の追究という域を出ていなかったのである。

(文責：重見晋也)



オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバルCOEプログラムでは21世紀COEプログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催しています。毎月1回水曜日の18時から、グローバルCOEが名古屋国際センタービルの15階に開設しているグローバルCOE オフィスで、「テキスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当者の先生やその他の先生がレクチャーします。参加は自由です。毎回の題目などはWebサイトでお知らせしています。本号では2009年11月以降に開催した2回の要旨を紹介します。

第22回

ロマン主義——哲学と美学——

ヴァンサン・ヴィヴェス 准教授 (プロヴァンス大学)

2009年11月18日(木)
18時—19時15分

19世紀フランスにおける最も重要な知的運動として知られているロマン主義は、主として文学・絵画・音楽における運動として知られているが、それはまた哲学や科学(特に生物学、数学、化学)における運動でもあった。

ロマン主義運動は決して均質な継続した運動だったわけではなく、本来的に18世紀の啓蒙思想に対する政治的・哲学的な反発として、特にフランス革命の理念に対する反発に端を発している。フランス革命は、神の恩寵を受けているはずの国王を殺害したが、この残酷な事件は唯物論的な考え方や人間の本性や関わり合い方の質に大きな変革をもたらしたといえる。「神の殺害」というこのトラウマこそが、ロマン主義の作家や思想家たちに大きな影響を及ぼした。

哲学者としてはドイツのエマニュエル・カントやイギリスのエドモンド・バークらは、各人異なるやり方ではあったものの、それまでの「美 (Beauty)」という概念に代えて「崇高 (Sublime)」という新たな美学観念を生み出した。18世紀後半においては人間が自然を統制できると考えられていたが、ロマン主義において人間は自然の支配下にあるもの、宇宙 (Cosmos) の一部をなすものと考えられるようになる。テオドール・ジェリコの作になる『メデューズ号の筏』はその好例であろう。こうして人間は、「純粋な知性」において定義されるのではなく、「感性」に基づ

いて定義されるようになるのである。

ところで、フランスから他のヨーロッパ諸国に目を移すと、フランス革命も啓蒙思想も合理主義もすべてが戦争をコノテーションとして持っていた。そこからフランスに対する祖国愛、フランス革命に対するカトリックという政治的構図を読み取ることができる。一方でフランスにおいては、ルネ・ド・シャトーブリアンが『キリスト教精髓』を発表し、イエスの名を借りてフランスに王政の復興を主張したように、ロマン主義は復古的なものとして受け取られたが故に、ナポレオン1世の失脚まで受け入れられることはなかったのである。

しばしばフランス・ロマン主義は、ユゴーの演劇作品に見られるような異種交配であるといわれる。こうした現象は作品のジャンルの混合や両性具有的登場人物などに見られるが、これはロマン主義があらゆる事象の制限なき交流を表現しようとするからに他ならない。文学作品においてはシャルル・ボードレールの『悪の華』などが代表例だが、音楽作品においてもフレデリック・ショパンやエクトル・ベルリオーズの『ファウストの劫罰』などで顕著な手法である。すべての要素が物質的特性も含めて連関 (concatenation) しているという考え方こそが、フランス・ロマン主義の基底をなしているといえよう。

(文責：重見晋也)

第23回

Festuca は知行の授与の際に用いられたのか

——家臣制の象徴儀礼をめぐる一つの試論——

加納 修 准教授 (名古屋大学大学院文学研究科・西洋史学)

2009年12月16日(木)
18時—19時15分

西洋中世において封建的な主従関係を締結するための儀礼は、次の三段階から構成されていた。すなわち、家臣による意思表示と手の交差からなるオマーージュ、接吻と誓約からなる誠実、そして象徴物を用いた知行の授与である。第三段階で用いられる象徴物の代表とみなされてきたの

が、festuca と呼ばれる棒や小枝であった。南フランスでは知行の授与の際にこうした象徴物は用いられず、代わりに贈与文書が作成されたこともあり、知行の授与における festuca の利用は、北フランスを中心とする封建社会が口承文化に刻印されていたことを示す証拠のように捉えられ

ている。

しかしながら、中世ラテン語辞典における *festuca* とその派生語の用例の調査は、*festuca* が知行の授与に用いられていたとする理解に疑念を抱かせる。実際に、封建制成立以前の時期、すなわちフランク時代において *festuca* は、とりわけ権利の放棄を示すのに用いられていたし、こうした *festuca* の用法は封主・封臣関係の解消の儀礼に受け継がれることになる。*Festuca* が、主君が権利を保持す

る知行の授与の象徴物へとスムーズに変容したとは考えがたいのである。この点で興味深いのは、イタリアを中心として9世紀後半から、権利の放棄を強く意味しない形で、*festuca* が土地譲渡において使用されるようになる事実である。文字文化のより発展した地中海地域で、*festuca* が再解釈され、場合によっては知行の授与の象徴物になり得た可能性がある。



グローバルCOE 研究員 ブリーフィング ⑦

グローバルCOE ポスト・ドクトラルの研究員は、個別の専門領域で扱っている研究対象をテキスト布置解釈学の枠組みで捉え直すべく、名古屋国際センターのグローバルCOE オフィスを中心に研究活動を行っています。研究員たちの研究成果は「研究員ブリーフィング」と呼ばれる事業推進担当者と研究員が集う場で議論され、研究論文へと結実していきます。

谷部真吾 ● 行為と伝承——見付天神裸祭における行事構成の分析を通して——

本発表では、静岡県磐田市で行われている「見付天神裸祭」を事例として、この祭りを構成する諸行事を分析することで当該儀礼の特徴について考察した。見付天神裸祭は、磐田市の北部に鎮座する矢奈比賣神社（通称：見付天神社）の例祭である。この祭りは、2000年12月に国の重要無形民俗文化財に指定され、現在28町内が参加し、腰蓑をつけた男性たちによって勇壮な行事が繰り広げられている。この祭りの行事は、大きく4つに分けられる。それは、①祭事始（大祭7日前）、②浜垢離（大祭3日前）、③御池の清祓（大祭前日）、④御大祭（大祭当日）の4つであるが、このうち①～③までは、その行事の形態からいって、見付の町中や参加者、さら

には神社境内を祓い清めるための行事であることは明らかである。また、④の御大祭における主要行事は、腰蓑をつけた男性たちが見付の表通りを行き来する「道中練り」と、彼らが見付天神社の拝殿に飛び込み、その中で体をぶつけ合う「鬼踊り」の2つであるが、これらの行事の持つ意味は明治期に書かれた記述や祭りの中で唱えられる祝詞からすると、陰陽道の技の1つである反閤であろうと推察される。こうした分析からすると、見付天神裸祭とは、この祭りに関わる人々や空間（境内および町中）を何度も祓い清めた上で、氏神を渡御させ、氏子域に祝福を与える祭りであるということができよう。

小林 智 ● 「出訴期限規則」の運用をめぐる一考察——理論と実務のあいだ——

いわゆる明治民法施行以前、消滅時効に関する実定法規として「出訴期限規則」があり、短期期限を設けていた。その運用は、債務者の正当な債務弁済の事実をその証拠滅失による証明困難から救うことにその制度趣旨を見る理論に拠ったとされる。

その理論は、規則適用の要件に、援用者による債務弁済の申立および期限経過以外の証拠の不存在を要求する。が、その厳格な運用は、たとえば比較的容易な反証の発見により規則適用を妨げ、実定法規の尊重という実務の要請に反する

ように思われる。

実際、米村壮宣判事は、援用者に債務弁済の申立を要求していない。また、商人同士の売掛に対する6ヶ月の期限設定につき、商取引関係の早期安定のため債権者に権利行使を促す趣旨であるとしている。

そうした米村判事の判決文には、実定法規を尊重することはもちろん、単なる拘子定規の適用に終始せず、その合理的運用を支える理論的理解を獲得する実務家の姿が垣間見える。

近世日朝外交文書研究のための史料調査

池内 敏 (推進担当者・日本史学)

9月23～27日、韓国国史編纂委員会(韓国京畿道果川市)および韓国国立中央図書館(同ソウル市)において、標記の史料調査を行いました。近世日朝間の外交文書作成に関わっては、1635年から以厩庵輪番制と呼ばれる新たな文書作成制度が導入されたことが知られています。今回の史料収集は、そうした制度導入以前における外交文書作成が、どのようになされていたかを解明するための作業です。以厩庵輪番制導入以後に作成された日朝外交文書が『本邦朝鮮往復書牒』なる記録にほぼ網羅的に収録されているのに対し、導入以前に作成された文書は体系的な整理がなされていません。1680年代ころに編

纂された『善隣通書』には、そうした1635年以前の外交文書が採録されており、網羅的にというわけにはいきませんが、以厩庵輪番制導入以前における日朝外交文書を検討する素材となります。そこで、国史編纂委員会では、同所蔵の対馬島宗家史料『善隣通書』をマイクロフィルムで閲覧し、筆写および複写して史料収集しました。

一方、外交文書の往復は具体的な折衝事案にもなって作成されます。国立中央図書館では、近世日朝間における代表的な外交折衝事案である元禄竹島一件にかかわる韓国側での最新の研究成果を検索し、必要なものについて複写収集を行ってきました。

国際シンポジウム「作家と印刷業者」への参加

鎌田 隆行 (推進担当者・フランス文学)

10月8日～9日にフランス、ル=マンのメヌ大学で開催された国際シンポジウム「作家と印刷業者」に発表者として参加した。同大学のアラン・リフォー氏を学術責任者とするこの研究集会は、近代以降、一般的に作者に帰せられてきた文学作品の制作と公開において印刷者が果たしてきた役割について、書物史の研究者と文学研究者が歴史的視座のもとに考察することを目的としたものである。二日間で二十名が発表する密度の高いプログラムが組まれ、書物史研究の泰斗フレデリック・バルビエ氏の基調講演に始まり、フランス、ベルギー、スイスなど各国の研究者による、扱う時代や地域が異なる多様な報告と討論が行われた。二日目の午後に発表した拙論では作家=印刷者としてのバルザックを主題とし、本格的な作家活動に入る前に印刷業を営ん

だ経験を持つこの小説家が、その印刷技術の知識を応用して独自の執筆方法のみならず、小説内での広告や新聞記事などの現物表象的テキストの美学的な提示を発展させていったことを作品の生成資料に基づいて論じた。書物の物質性の問題のエキスパートである研究者たちと率直な意見交換を行うことができ、多くの示唆を受けた。ただし、従来型の生成論は印刷段階の手前である草稿の特権視してきたために、書物史との直接的な接点を持たなかったが、バルザックの作品生成論のように「印刷物のジェネティック」(ヴァッション)を志向するやいなや、書物史との関わりは必須となる。だがそれにもかかわらず、両者の関係については管見の限りまだ本格的に論じられていない。今回の意見交換を奇貨として、今後この問題の考察に取り組みたい。

2010年度開催予定の国際研究集会打合せ——フランス・プロヴァンス大学

重見 晋也 (技術統括責任者・電子テキスト学)

1月14日より1月17日迄の期間、フランス、エクサン=プロヴァンスのプロヴァンス大学を訪問し、平成22年度と平成23年度の2回にわたってプロヴァンス大学と文学研究科グローバルCOEプログラムの共催で開催する予定になっている国際研究集会のうちプロヴァンス大学で開催する国際研究集会について、その概要や開催期間の打合せをプロヴァンス大学にて行った。今回の国際研究集会は、プロヴァンス大学のフランス文学研究グループであるCIELAM (Centre interdisciplinaire d'Etude des litteratures, Aix-Marseille) とグローバルCOEとの共同研究として位置づけることができる。

打合せには、プロヴァンス大学から、博士後期課程主任のジャン=レイモン・ファンロー教授、プロヴァンス大学フランス文学研究グループ責任者のジャンタル・コノキ=プルニョ教授、国際研究集会開催責任者のクロード・ペレス教授、ヴァンサン・ヴィヴェス准教授の4名に同大学国際交流担当副総長のジャン・ヴィヴィエス教授を加えて行い、国際研究集会の内容、規模、期日、プロシーディングの刊行など

について議論した。

平成22年度に計画している国際研究集会については、プロヴァンス大学がフランス以外のヨーロッパの大学と締結しているLEA-Europe、およびトゥールーズ大学の研究グループPLH (Patrimoine, Litterature, Histoire) など、総勢18名程度の発表者が3日間にわたってフランス文学を対象として「現代における文学」をテーマにすることを確認した。また開催にあたっては、フランス国内の文学研究オンラインサイトであるFabulaにも協力を要請することを確認した。加えて、博士課程後期課程学生あるいはポスドクの参加を積極的に促すことも確認した。グローバルCOEからは、文学研究におけるテキスト布置解釈学の意義と重要性に関わる発表を行う予定である。開催期間は現在のところ決定していないが、2011年1月以降に行うこととし、早急に日程の調整を行うことを確認し、プロシーディングスについてもプロヴァンス大学出版局から発行することを予定している。

台湾国立清華大学から黄一農教授を招聘

これまでにも何度かこのGCOE NEWSLETTERでお知らせしていましたが、グローバルCOEが中心となって台湾国立清華大学人文社会学院との間に、博士課程後期課程を中心とした学術交流協定が締結されることが決まりました。これを記念して、人文社会学院の元院長で台湾における最高学術機関である中央研究院のメンバーでもある黄一農 (Yi-Long Huang) 教授をグローバルCOEとして招聘し、講演会を開催することになりました。

講演題目(通訳付)「Cultural interaction between East and West」

日時 2010年2月23日 15時～ 場所 (未定)

先生の講演は中国語で行われますが、通訳を準備しましたので、奮ってご参加ください。

グローバルCOE 論文賞の募集 ● 2009年度第2回

グローバルCOEでは論文を募り、「グローバルCOE論文賞」として顕彰し、2010年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。

2009年度第2回グローバルCOE論文賞募集

応募期間 2010年2月18日(木)～2月26日(金) 16時半まで

応募先 グローバルCOE事務局(文学研究科講義棟131室)

応募方法について詳しくは下記URLでグローバルCOEのWebサイトにアクセスしてご確認下さい。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/>

グローバルCOE論文賞についての質問は、グローバルCOE事務局までお願いします。